

学校生活の満足感を形成する要因の検討

— 学校ぎらい感情からみた分析^{注1)} —

A Study on Factors Bringing on Satisfaction to School Life
— An Examination from the Willingness to Attend School —

吉川栄子・高橋宗

Yoshikawa Eiko, Takahashi Shu

要 約

本研究では、学校生活に満足感を与える要因を明らかにするために、中学生及び高校生を対象に、学校ぎらい感情得点の高群と低群の間で検討した。その結果、予備調査の中学生では、信頼感において有意な傾向が見られ、高校生では信頼感、自己受容、自尊感情において有意な差が見られた。その後、本調査を中学校の1年生から3年生で実施した。その結果、学校ぎらい感情得点の高い—低いによって、自己や他者への信頼感や自尊感情に大きな影響を与えることが判った。また、その背景になっているのがソーシャルスキルである。特に他者に対する配慮のスキルとかかわりのスキルが十分に形成されているかどうかによって、学校ぎらい感情が生起する要因になることについて検討され、明らかにされた。

Key Words：学校ぎらい感情，自尊感情，自己受容，ソーシャルスキル，学級満足

はじめに

近年、学校における児童・生徒の適応に関する問題（不登校やいじめ、校内暴力や学級崩壊などの問題）が大きく取り上げられ、子どもの学校不適応行動や問題行動の増加は大きな社会問題にまでなっている。

文部科学省の平成19年度学校基本調査速報によると、平成18年度の長

注1) 本研究の一部は日本教育心理学会第49回大会（平成19年9月15日～17日開催，文教大学越谷キャンパス）において報告を行った。

期欠席者（30日以上欠席者）数は、小学校で6万1千人、中学校で13万5千人である。また、「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校で2万4千人、中学校で、10万3千人である。

このことから、平成18年度の長期欠席者のうち、「不登校」を理由とする児童生徒数は12万7千人である。不登校とは、文部科学省によると「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない、あるいは、したくともできない状況にあること」と定義づけされている。

この学校不適応や問題行動の原因について、子どもの社会的スキルの欠如や不適切であることに原因を求めようとする研究方法が注目されてきている（佐藤・立元,1999）。社会的スキルとは、人間関係の円滑な形成や維持に必要とされる技能である。社会的スキルにかける子どもは、社会的不適応の状態に陥る確率が高いことが佐藤（1996）によって指摘されており、同じように、孤独感を経験しやすいことについても、相川（1998）によって説明されている。また、発達段階に応じた基本的な社会的スキルが欠如していたり、場に応じて社会的スキルを適切に実行できなかつたりするために、子どもがストレスフルな状況に陥っていることが多いことも指摘されている（丹羽・山際,1991）。したがって、社会的スキルは、児童生徒が、良好な人間関係を築き、適応的な学校生活を送る上での重要な要因であり、他者との相互作用の中で学習されるものと考えられている。

学校不適応に陥る児童生徒の数は増加しているが、その中に、人間関係の不調から学校不適応に陥るケースも多く見受けられている（学校不適応検討委員会,1991）。このような、人間関係における問題には、社会的スキルが深く関係している。たとえば、引っ込み思案スキルを多く獲得している中学生は、友人関係にまつわるストレスを強く感じており、さまざまなストレス反応を強く表出していることが岡安他（1993）達によって明らかにされている。戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野（1995）は、向社会的スキルを獲得している生徒は、すべての友人関係において、友だち関係を築くことができ、

不適応感が低い。それに対して、引っ込み思案スキルを獲得している生徒は、すべての友人関係において、友達関係を築くことが出来ず、不適応感が高いことを明らかにしている。

また、青年の適応感に関する研究では、学校への適応感や不適応感に焦点をあてて研究がおこなわれてきた。本間（2000）の研究によれば、従来の学校への適応感についての研究では、学校への適応感や不登校感の測定において、学校環境として求める要因（友人との関係、教師との関係、学業）を、あらかじめ研究者側が設定していることが多い。したがって、これまでの学校への適応感研究では、友人関係、教師との関係や学業との関係では、どの学校においても同じ価値が置かれ、学校適応に対して正の影響を与えているという考えでもって研究がなされている。その結果、友人との関係がよく、教師との関係もよくて、学業にも積極的に取り組む青年が、最も学校に適応していると考えられてきた。しかし、現実には、教師との関係が悪くても、学校への適応の問題を抱えていない青年が存在していることについても判ってきている。それに対して、積極的な学業への取り組みがなくても、学校への適応の問題は抱えておらず、満足感を形成している青年も存在することを指摘している。

荻間澤・河村（1999）は、学校生活に嫌悪感や忌避的感情を抱いている生徒についての研究をおこなっている。このような研究は、中学生を対象にした登校忌避的感情に関する研究であり、友人適応や学業適応が重要な要因であることを示している。それに対して、高校生を対象にした場合では、登校忌避的感情に対して、学習への適応得点、部活動への適応得点、学級への適応得点、教師への適応得点、校則への適応得点が負の予測子であることが示唆されており、高校生にとっては、学習への適応、部活動への適応、学級への適応、教師への適応、校則への適応が、登校忌避的感情に影響を与えていることを明らかにした。

一方、中学生を対象とした心理的ストレスについて調べた研究（三浦・上里，2002；岡田，2002；岡安・嶋田・坂野，1993；嶋田，1998；神藤，

1998；山本・仲田・小林，2000など）では，学校ストレッサーがストレス反応を高めたり，学習意欲を低下させていること。ソーシャルサポートやストレッサーに対するコントロール感が，ストレス反応を軽減する要因になっていることについて報告している。また，ストレス反応の表出が高い生徒ほど，“学校がつまらない”“学校に行きたくない”と感じる傾向を示していることについても明らかにしている。

また，古市（1991）によると，学校ぎらい感情に及ぼす性格や，適応傾向（家庭適応，教師適応，友人適応，学業適応）との相対的影響について検討しており，その結果，中学生では友人適応感が最大の影響力をもっている。それに対して，女子では教師適応の影響も有意に関係していることを見出している。このようなことから，学校ぎらい感情をもつ生徒の特徴として，性格や心理状態，また家庭環境や学校での対人関係の持ち方に問題があることを報告している。

そこで，本研究では，学校生活において満足感を形成する要因を明らかにするために，学校ぎらい感情の高い生徒と低い生徒を抽出し，その両者を比較検討する中で，明らかにすることを目的とした。

方 法

被調査者

予備調査：滋賀県内の A 中学校 2 年生 1 クラス（31名）

B 高等学校 2 年生 1 クラス（31名）

本 調 査：滋賀県内の A 中学校全学年

（1 年生109名，2 年生98名，3 年生94名，合計301名）

調査期間 調査は，予備調査を2007年2月に実施。本調査は2007年5月に実施した。

質 問 紙 調査に用いた質問紙は以下の通りである。また，質問項目として，以下の尺度が含まれるように構成された。

1. 学校生活についてのアンケート
 - ① 学校ざらい感情尺度（古市，1991）
 - ② 自己受容尺度（興津・水野・上西・吉川・高橋，2003）
 - ③ 信頼感尺度（天貝，1995）
2. 自己意識，他者意識に関する調査
 - ① 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）
 - ② 情動的共感性尺度（加藤・高木，1980）
3. Q-Uアンケート（河村，1999）（図書文化社発行）
4. ソーシャルスキルテスト（河村，2001）

なお，調査項目に用いられた各尺度の回答は，すべて5段階法で評定できるようにした。

実施手続き 学校生活への気持ちを把握するために，古市が作成した学校ざらい感情尺度によって構成されている調査を実施し，それに基づいて，学校生活を好意的にとらえているか，回避的にとらえているかを感情得点として測定した。それに基づいて下記のようなグルーピングを行った。また，学校生活への適応の状況を把握するために市販されているQ-Uアンケートを実施した。その他に，ソーシャルスキルアンケートや自尊感情尺度などを測定する質問紙による調査も同時に実施した。調査は，各学級単位で，担任が調査用紙を生徒に配付し，記入上の注意事項を説明した後，開始した。調査時間は，各調査とも15～20分程度で実施。全員の生徒がほぼ記入した後，その場で調査用紙を回収した。

学校ざらい感情によるグルーピング 学校ざらい感情得点の上位20%を学校ざらい高群，下位20%を学校ざらい低群とした。

その結果，予備調査のA中学校では高群として6名，低群として11名がグルーピングされた。また，B高等学校では高群が8名，低群では19名が，その対象となった。

同じく，本調査におけるグルーピングの結果，1年生では高群が18名，

低群が20名。2年生では高群が10名、低群が11名。3年生では高群が13名、低群が14名がそれぞれ分析の対象となった。

分析 各調査の項目に従って、データ入力を行い、グルーピングに基づいて、対象となったデータの処理を行い検討した。なお、自己意識、他者意識に関する調査の中で、情動的共感性尺度のデータについて、本研究では対象外とした。

結 果

「予備調査」

予備調査で得られた、A中学校とB高校の学校ぎらい感情尺度による感情得点の平均とSDを表1に示した。表からも判るように、中学校では高群と低群の間に大きな差が見られるが、高校では見られていないことが判

表1 学校別における各群の学校ぎらい感情得点

		A中学校	B高校
高群	平均	44.33	28.37
	SD	2.23	1.27
低群	平均	16.55	13.13
	SD	2.43	2.89

表2 学校別における各群の要因の平均

	A中学校		B高校	
	高群	低群	高群	低群
自尊感情	29.00	32.36	25.50	34.47
自己受容	14.50	14.09	12.00	15.53
自己信頼	18.67	19.36	18.00	21.37
他者信頼	24.67	29.36	25.38	31.42
不信	35.00	24.91	31.50	22.42

る。次に、学校ぎらい感情がどのような要因に影響を与えているのかを検討するため、学校ぎらい感情得点を独立変数とし、自尊感情、自己受容、信頼感（自己信頼、他者信頼、不信）を従属変数とする分散分析をおこなった。その結果は表2に示すとおりである。分析の結果、自尊感情の得点において、中学生では差は見られなかったものの、高校生においては有意な差が見出された ($F(1,25) = 17.74, p < .001$)。また、自分を受け入れることが出来るかどうかといった自己受容の得点においても、中学生では差は見られなかった。しかし、高校生においては有意な差が見られた ($F(1,25) = 5.46, p < .05$)。一方、信頼感の下位尺度項目である自己信頼や他者信頼、不信感といった各項目においては、高校生では有意な差が見られたが、中学生では有意な傾向

が見られた。このように、中学生と高校生では違いが見られるが、学校ざらい感情得点の高群と低群の生徒では、各要因間に差が見られることがわかった。

「本調査」

予備調査において、学校ざらい感情と各尺度の結果との間に差が見られたが、中学生においては明白な結果が得られなかった。そこで、その点について再度、検討することと、Q-Uテストによって示される学級満足度との関係を検討する目的で、本調査として、A中学校の全学年において同様の調査を実施した。表3に学校ざらい感情得点の学年別平均とSDを示した。それによると、学年があがるにつれて、高群は低群に比べ

表3 学年別における各群の学校ざらい感情得点

		1年生	2年生	3年生
高群	平均	35.17	48.10	46.54
	SD	5.52	4.13	5.18
低群	平均	12.30	12.46	12.93
	SD	0.46	0.50	0.80

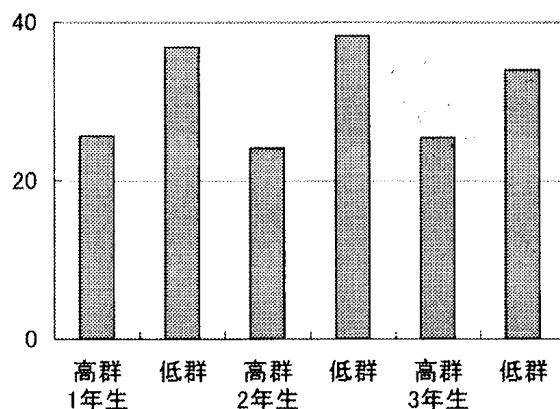


図1 学校別の高群と低群における自尊感情得点との関係

て、学校ざらい感情得点の平均値が高くなっていることが判る。このことは、中学1年生から3年生へと進級するにつれて、学校ざらいの感情が高まる傾向にあると言えるだろう。

次に、学校ざらい感情得点の高群と低群において、他の各尺度の結果との間にどのような関係が見られるかについて検討をおこなった。図1は学校ざらい傾向と自尊感情尺度との間について検討したのが図1である。図からも判るように、各学年とも学校ざらいの高群は、低群に比べて自尊感情の得点が有意に低かった（1年生 (F (1,36) =41.87,p<.001) 2年生 (F (1,19) =58.30,p<.001) 3年生 (F (1,25) =15.50,p<.001)) (図1)。この結果は、予備調査で実施した中学生の結果とは異なり、明らかな差が見られた。すなわち、中学生においても自尊感情と学校ざらい感情の間には関係があるこ

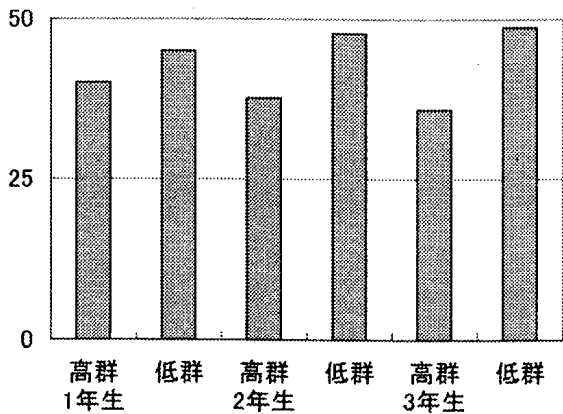


図2 学校ぎらい高群・低群とかわりのスキル得点との関係

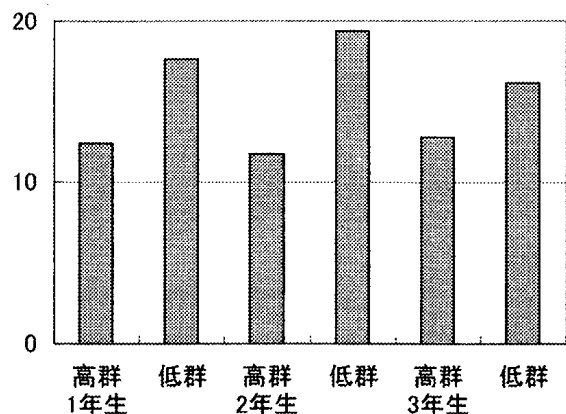


図3 学年別の高群と低群における自己受容得点との関係

とが示された。また、信頼感尺度による自分への信頼や他者への信頼、不信感といった要因との間にも有意な差を見出すことができた(1年生(F(1,36)=18.60~60.91,p<.001) 2年生(F(1,19)=33.27~33.68,p<.001) 3年生(F(1,25)=7.12~15.83,p<.05))。

これらの結果も予備調査の中学生においては差が見られなかった。しかし、高校生においては学校ぎらい感情の高い群と低い群との間に有意な差が見られた。今回の本調査では、中学生においても、3つの信頼感の要因との間に差を見出すことができた。

一方、学校生活における友だち関係において、重要な要因と考えられる、他者の気持ちに対して「配慮したり」、「かかわる」といったソーシャルスキルとの関係を検討してみた。その結果、図2に示すように、かわりスキルの関係においては、2年

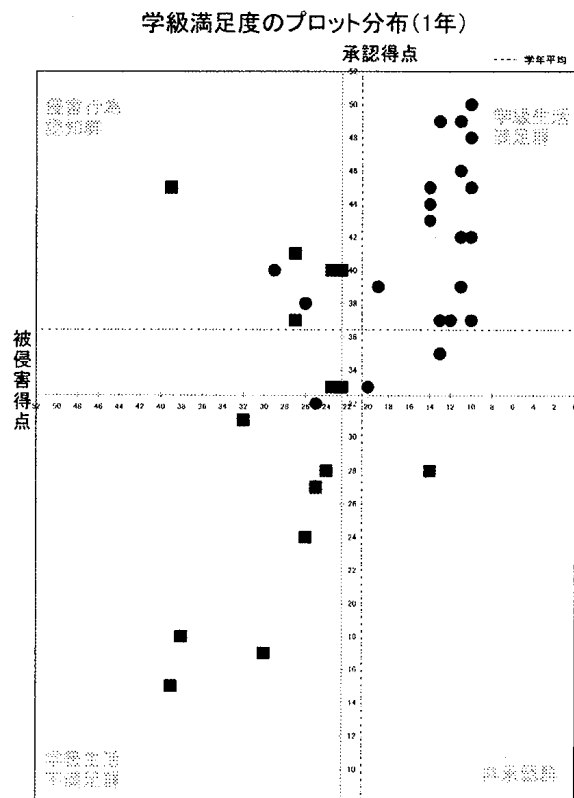


図4 中学1年における学校ぎらいと学級満足度との関係分布

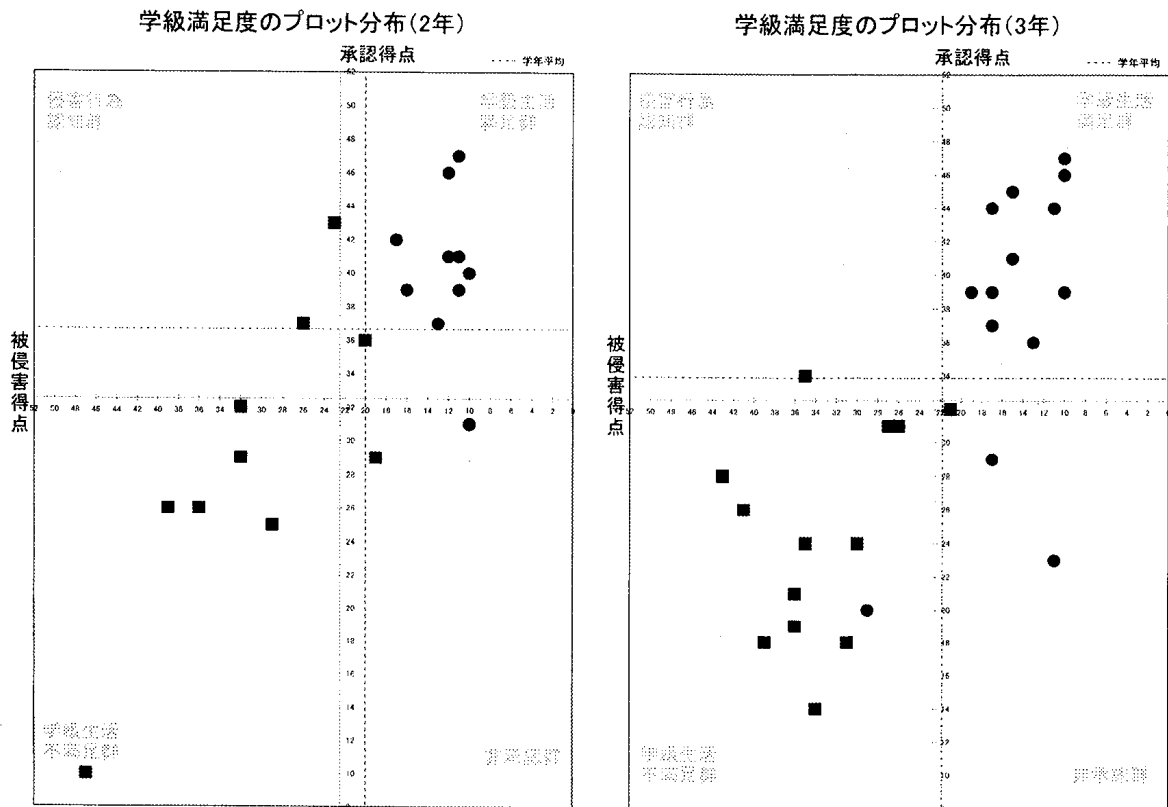


図5 中学2年における学校ぎらいと学級満足度との関係分布

図6 中学3年における学校ぎらいと学級満足度との関係分布

生，3年生では有意な差が見られた（2年生 $F(1,19) = 11.94, p < .005$ ）3年生 $F(1,25) = 21.72, p < .001$ ）。しかし，1年生においては有意な傾向が見られる $F(1,36) = 3.05, p < .10$ ）に過ぎなかった。また，他者への配慮のスキルと，学校ぎらい感情との間には，2年生では差が見られた $F(1,19) = 5.57, p < .05$ ）が，1年生と3年生では見出すことが出来なかった。同様に，自分の感情を受け入れることが出来るかどうかの，自己受容感情の要因については，図3からも判るように1年生と2年生では高群と低群との間に差を見出すことが出来たが（1年生 $F(1,36) = 17.46, p < .001$ ）2年生 $F(1,19) = 29.43, p < .001$ ），3年生では，傾向が見られる $F(1,25) = 3.95, p < .10$ ）に過ぎなかった。

そこで，学校ぎらい感情の高群と低群が，Q-Uテストで示される学級生活満足度尺度の「承認得点」と「被侵害得点」との間に，どのような関係があるかを見るためにプロット分布で検討したのが図4～6である。図から

も判るように、分布状況は各学年とも、学校ざらい感情の高い群は学級生活不満足群に属し、低い群は満足群に属するといった、いわゆる斜目タイプのプロット分布を示している。この分布傾向の学校ざらい高群においては、1年生では侵害行為認知群と学級生活不満足群の両領域に拡散しているのが見られるが、2年生から3年生と進級するにしたがって、学級生活不満足群に凝集されるような分布状況を示しているのが特徴である。

このような分布の推移の状況から考えても、1年生から3年生と学年が進むにつれて、学校ざらい感情が学校生活への不満な状況を促進する要因になっていると考えることが出来ることが判った。

考 察

予備調査の結果では、中学生と高校生との間に、学校ざらい感情と各尺度によって示される要因との間には、必ずしも同じ傾向は見られなかった。しかし、本調査で実施した中学生と高校生とでは、ほぼ同じような傾向が見られた。そのことから、学校ざらい感情得点の低群の生徒は、高群の生徒と比べて、他者や自分を信じる事が出来る。また、現状の自分の姿を素直に受け入れることの出来る、自己受容の気持ちを十分にもっていると言えるだろう。すなわち、他者への信頼感と自分への気持ちを正しく認識できる要因が高い事から、学校生活における集団内での対人関係において、よりスムーズな人間関係性を形成することを可能にしている。したがって、学校ざらい感情の要因が自尊感情や自己受容の要因をプラスの方向に作用している事が考えられ、学校生活の満足感を高める行動になっていると判断できる。このことは、Q-Uアンケートの承認得点や被侵害得点との間においても有意な差が見られており、プロット分布としても明らかに示されたことから裏づけられる。

しかしながら、中学生では、自分のことを受け入れる自己受容の要因が3年生になると減少することが明らかになった。この原因の1つに、思春期の精神的な不安定な時期であることが考えられる。特に、中学3年生は高校へ

の受験といった特異な環境条件が加わることにより、自己の存在意義を見通す事が出来なくなったり、不安感情の高揚が自己認知の働きを減少させているとも言える。したがって、学校ぎらい傾向の高い群では、他者との関係が更にもうまく築けず、逆に孤独感や不満感がより高まっていく傾向にあると言える。そのことは、本調査の結果からも判るように、学校生活の中において自己の存在を十分に見通すことができにくい場合には、学校ぎらい感情を上昇させ、マイナス要因として働くことになっていると言えるだろう。人間関係において、他者を信じ受け入れることは、自分を受け入れ自己の存在価値を認めることでもある。そのためには、他者との関係性を築く基になっていると考えられている、ソーシャルスキルの能力がどのように形成されるかが重要な要因と言える。特に、他者への気持ちが判るといった「配慮のスキル」が十分に形成されることは、集団の中で他者から認められる要素でもあることから、自己の自尊感情を高める傾向につながっており、友だちとかかわるスキルにも強い影響を与えていると考えられる。戸ヶ崎ら（1995）の研究によって明らかにされたように、社会的スキルの変化と友人関係との関係で向社会的スキルが増加した生徒は、相互に信頼しあえる友人を多く得ることができる。すなわち、社会的スキルを多く獲得している生徒は、さまざまな状況での友人関係を築くことができ、学校生活において、満足感を十分に感じることに繋がっていると言える。それ故、本調査のプロット分布の学年的推移の中で、学校ぎらいの高い群と低い群において、高学年になるほど分布状況が明確に分離するといった結果は、ソーシャルスキル能力を十分に発揮できているかどうかの違いとして考えることが出来る。

また、古市・玉木（1994）の研究で、学校生活が楽しいか楽しくないかや、学校に対して忌避的な感情をもったり、不登校状態に陥ったりするのも、学校内の友人関係がうまく形成されているかどうか、といった事と大きく関係していることの報告とも一致している。

本調査から、中学生が、学校生活に満足感の感情を形成することが出来る要因は、友達との関係性の状況が良好に感じられる時である。そのことによ

り自己や他者への信頼が高まり、自分の存在を認識できるといった自尊感情を形成することが出来る重要な要因にもなっていることが明らかにされた。すなわち、個々の生徒が自己の存在意義を認識できるためには、他者との関係性を築くスキルを豊かに形成されつづける必要がある。それは、個々の生徒が、いろいろな学校生活の状況の中で、その時その時に会う先生や、友だちとの人間関係によって育成されるものである。そのような視点に立って考えるならば、学校生活の中で友達関係をよくするためには、相手の気持ちを思いやるスキルと、その気持ちを具体的な行動として示すことが出来る、かかわりのスキルを修得する学習場面が求められるであろう。本来、他者との関係性は、幼少期より学習によって個々人の中で、1つ1つ体得されてくるものである。しかし、学校生活における集団の中で、他者とのかかわりによって得られるソーシャルスキルは、人間関係における信頼感を高め、各自の自尊感情にも大きく反映される。それによって、生き生きとした学校生活を送ることができる気持ちと行動が生み出される要因にもなっていると考えられる。このような視点にたつと、子ども達を取り囲む現代の社会状況の中で、ソーシャルスキルの修得のために、家庭や学校、地域において積極的なプログラムを提供することが不可欠であると考ええる。

なお、今回の予備調査でおこなった高校のデータは、女子のみのデータであった。今後は、男女混合のクラスでの調査及び、男女差の問題についても検討をおこなう必要があると考えられる。また、高校生を対象とした各学年間における時系列分析についても、検討することが課題として残された。

引用文献

- 相川 充 1998 孤独感を低減させる社会的スキル訓練の効果に関する実験社会心理学的研究 平成8年度～平成9年度科学研究費補助金（基礎研究(c)(2)）研究成果報告書
- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.

- 古市裕一 1991 小中学生の学校ざらい感情とその規定因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 古市裕一・玉木弘之 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究収録, 96, 105-113.
- 本間友己 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 荻間澤勇人・河村茂雄 1999 高校生の登校忌避的感情と学校生活適応の関係 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 245.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1) —学校生活満足度尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, 32, 274-282.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(2) —スクール・モラル尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, 32, 283-291.
- 河村茂雄 2001 グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム中学校編 図書文化
- 三浦正江・上里一郎 2002 中学生の友人関係における心理的ストレスモデルの構成 健康心理学研究, 15(1), 1-9.
- 文部科学省 2007 平成19年度学校基本調査速報
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/07073002/001.htm
 (情報取得日2007年10月11日)
- 丹羽洋子・山際勇一郎 1991 児童・生徒における学校ストレスの査定 筑波大学心理学研究, 13, 209-218.
- 岡田佳子 2002 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての検討— 教育心理学研究, 50, 193-203.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャルサポー

- トの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 興津真理子・水野邦夫・上西恵史・吉川栄子・高橋宗 2003 不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連 聖泉論叢, 11, 27-37.
- 佐藤正二 1996 社会的スキルと対人関係 誠信書房
- 佐藤正二・立元 真 1999 児童生徒の対人関係と社会的適応・予防的介入 教育心理学年報, 38, 51-63.
- 嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房
- 神藤貴昭 1998 中学生の学業ストレスと対処法略がストレス反応および自己成長感・学業意欲に与える影響 教育心理学研究, 46, 442-451.
- 戸ヶ崎泰子・秋山香澄・嶋田洋徳・坂野雄二 1995 中学生の社会的スキルが友人関係と学校不適応感に及ぼす影響 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 557.
- 戸ヶ崎泰子・嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 1995 社会的スキルの変化が友人関係と学校不適応感に及ぼす影響 日本行動療法学会第21回大会発表論文集, 180-181.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 2000 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応の関連—学校不適応予防の視点から カウンセリング研究, 33, 235-248.

付 記

本稿は平成19年度私立大学等経常費補助金特別補助 地域共同研究支援の助成による研究成果である。